

一郎、二郎、合コンに行く

caution

この作品はヒプノシスマイク非公式ファンブックとなります。

碧棺左馬刻×山田一郎と入間銃兎×山田二郎のcp本です。

普段はあまりないcpをメインで取り扱っていますが、一番好きなcpのため筆を執らせていただきました。。初めてのサマイチと銃二のため、口調がおかしかったり、こんなこと言うかしらということがおそらくあります。それでもいいよという心優しい方のみご覧ください。少しだけ前半も変えています。

当作品は以下の要素を含みます。

ヨコハマ優勝エンディング

合コン

Dom/Subユニバース

左馬刻→Dom

一郎→Sub

銃兎→Dom

二郎→Sub

合飲→Sub

乙統女→Switch

無花果→Dom

女モブ→Dom

女モブ（CP要素なし、設定もりもり）が最初出てきます。

過去、今後の捏造あり

パートナーを解消した過去あり。（してない）
中王区目線での過去捏造あり

コンコンと楽屋の扉が叩かれる。ファイナルラップバトルと称したバトルにてMTCは見事に祈願の優勝を果たした。ステージの上で渡された真正ヒプノシスマイクはステージで捨てたはずだ。盛り上がりを邪魔された気分だが、入ってきた人物を見てその怒りは無くなる。H歴というクソみたいな年号が出来た時、唯一何の偏見も無く関わっていた中王区の奴だ。総務庁長官で銃兎が言うには警視庁長官ではないかとさえ言われている。その立場のくせに、一切表に出さず言の葉党の連中の言うことを基本的に聞いている変わった奴。

男性の税金を10倍にするという暴挙に、文句こそ言えど誤魔化さず払ったのはコイツが居たからだ。女どもには手を出さないというポリシーがあるのに、言の葉党や中王区などにはマイクを向けられたのもコイツが関係している。初対面はヒプノシスマイクもわざわざ持って

きた時、俺が鼓膜を自分で破ったとき人質の中にも居た。

「マスコミの対応は終わったんですか？」

「終わった。」

「何しにきやがった」

「呼ばれたからだが？」

「呼ばれた？小官でも左馬刻でもないとする、銃兎か」

「ええ。山田二郎がSubだと判明したと風の噂で聞きまして」

「先生に聞けばよくない？なんで私？」

「はあ。医者が言うわけないでしょう？馬鹿ですか？」

「そりゃそうだ。私知らないけど」

「嘘は結構です。今後政権が交代するのは確定でしょう？」

「へえー。そうなんだ。知らんけど。」

「そうですか。なら、あなたのポストは変更なしに」

「勘弁して！！はあ...まあ、変わるでしょ。」

「でしょう？なので、お願いがあるんですよ」

「何？」

「合コンを開いてもらいたいんです」

「は？」

「あ？」

「これはあなたにも関係あるんですよ、左馬刻。」

「どういうことだ」

「一郎君は、弟たちが成長するまでは恋人を作らない、けれど今日成長したのは見れたはずですよ。」

「なるほどな。」

「あなたは、一郎君とパートナーを解消し、今まだ戻れていないのでしょうか？」

「嗚呼。プレイ自体断られてる。けど、ははっ。そおだな」

「ご機嫌ですね。
成長した姿を見て、別のパートナーを作ろうとしないとも限りません。政権を交代したら常に監視も厳しいでしょう」

「あ？あいつは俺ンだ」

「だから、合コンを開くんです。」

「なるほどね。理鶯は来るの？」

「ふむ。小官の気になっている人は第二性が明らかに
なってないので遠慮させていただこう。」

「そんな人、1人しか居らんで」

「第二性で選ぶわけではない。無理やりSub性にするのも酷だろう」

「左馬刻はどうしますか？」

「行くに決まってンだろ」

「では、一郎君と二郎を誘っていただけますか？」

「はいはい。普通は、兄弟で合コンには参加せんのよ」

「ああ。あなたは欠席してくださいね」

「言われなくても欠席ですけど。大体、政権交代すんだから中王区は忙しくて無理だって」

「...ふむ。疲れているようだ。何かあったのか」

「合コンが終わったら教える。あなたたちにも関係あることだから」

「ア？今言えや。」

「私はまだ隠居できなくて、言の葉党は暫く政権交代しても出張らないといけないってこと」

「ンでだよ」

「...仄々が見つからないのよ」

「仄々...だ？」

「嗚呼、言浚（ことさらい）の」

「そう。どうする？今聞く？」

「良い。長くなんだろ。楽屋の時間あんだろ。今度教える」

「はいはい。その時には解決してたいけどね」

「政権交代のタイミングで動きそうですね。」

「来週の月曜、19時にブクロの××」

「は？」

「合コンの日付と場所。」

「ふむ。それが良いだろう。小官たちも早く協力出来た方が良さそうだ。」

「そうですね。水曜日に教えていただけますか？」

「え？？クソ忙しいって言ってのに空けると？」

「お前なら出来んだろ」

「はああ？人使い荒いて」

「どのみち、貴女は政権が交代しても役職に就くのだろう？」

「え？？い、隠居したい」

「無理でしょう。仮に総務庁長官は降りれても、もう1つの役職は降りれないでしょう？」

「な、何のことやら」

「どっちでもいい。掛け持ちか掛け持ちじゃねえかの違いでしかねえから」

「...い、今なんて？」

「リーダーもこう言ってますし」

口から魂が抜けたような顔をしてフラフラになりながら出ていく背中に銃兎が、日付と場所を叫ぶ。片手が拳がったから了承の合図だろう。決まったら銃兎にでも連絡が行くのだ。何やら大荒れしそうだが、来週の月曜は楽しみだ。待ってろよ、一郎、と内心で高笑いした。

「...合コン？」

「そう。主催の子が二郎くんをどうしても誘えないかって。お願いできない？依頼って形でも良いから」

「それって危なくないのか？」

「不安なら一郎くんも参加して良いから。お願い！」

「...に、兄ちゃんがついてきてくれるなら」

「...あなたも参加するんすか？」

「危なくないように私も行くから。嫌かな？」

「ということは、Domの女性も来ますよね？」

「そうだね。中王区の女の子が主催だから」

「危険です！」

「どうしても無理なら...」

「いえ...分かりました。」

「いち兄！！！」

「この人にはTDDの頃から世話になってるし、一生かけても返せねえ恩があるんだ」

「この人が来るなら、いち兄は行かなくても！！」

「二郎が決める」

「いち兄！！！」

「政権が交代するってことは、言の葉党の人たちより、この人は忙しいはずだ。そんな人がここまで言うてる。」

「心労は減らしてあげたい...と？」

「そうだ。二郎が決める」

「兄貴が来ていいんだよね？」

「え？うん！」

「じゃあ、行く。でも、あんた忙しいなら2人で行ける。ブクロなんですよ？」

「ホント！？助かるよ。」

そう！中王区はまだ入れないから男性側がイケブクロを提案してみたいで」

「二郎！！」

「...あんまり難しいことは分かんねえけど、俺ら3人の税金を安くしてくれたの、この人なんだろう？

なら、俺にとっても恩人だから」

「...っ！」

「それに、俺第二性が安定してないから、Sub drop しやすいんだ。抑制剤飲んでっけど、パートナー作った方が良いつて」

「二郎...。」

「流石に、その合コンでパートナーになったりはしねえけど、この人の知り合いならヤバすぎることねえだろ」

「...心痛」

「ヤバかったら駆けつけるので言ってください。そのお店、防犯カメラ無いみたいなので」

「ああ。連絡はお願いしてもいいか？」

「え！？ああ、任せて！」

「...はあ。」

「ところで兄貴。真正ヒプノシスマイクって結局なんなんだ？」

「...は？」

「まだ言ってなかったな。後から教えてやるよ。」

「MTCもステージで放棄してましたね。いち兄も放棄する気だとは聞いていました。どうするんですか？」

「あんなもん無い方が良いんだけど、無くせないんだよね」

「なんでっすか？」

「まだ、言の葉党がしたことの全てが清算出来たわけじゃないからね」

「どういう」

「これ以上は内緒！じゃあ、よろしくね！バイバーイ」
俺らは、真正ヒプノシスマイクなんてもんは無い方が良く
いと思った。リーダーは全員思ったはずだ。だから、左
馬刻も放棄した。でも、そんな単純な話じゃないのかも
知れねえな。だとしたら二郎や俺が、パートナーが居な
くて、Sub dropしまくって抑制剤に頼っている状態
は良くない。ついていくだけの予定だったが、二郎がそ
の場でパートナーを作らなくても、俺は本気で見つけた
方が良いだろう。あの人が紹介する人だ、ヤバい人では
ないだろう。寂雷さんの予想だと、左馬刻以外は受け入
れられない可能性があると言っていた。でも、もう一回
解消されたら耐えられない。プレイしただけで第二性は
悦び、パートナーと認識するだろう。ただでさえ恋愛感
情は一度も消えなかった。だからこそ、断ったのだ。
パートナーが見つければ諦めるだろう。来週の月曜、
か。二郎が誘われた手前、俺が動くのは良くないだろう
が、絶対にパートナーを見つけよう。

「で？あいつらは来ンのか？」
予約を銃兎したらしく、2人で指定したお店の席に着
く。個室がある店だが珍しく2人ともタバコには手を付
けていない。理由は簡単で、中王区の人物はタバコを吸
わない人が多いため開ける前にバレたら元も子もないか
らだ。それに、未成年が来る。タバコを吸う奴はいない
だろう。19時というギリギリ許される時間にした奴が
吸うとも考えにくい。本来なら一郎と二郎を待たせるこ
とも出来たが、何分前に来るかも分からない。だつた
ら、待つ方が良い。左馬刻は堂々と上座に足を組み座
り、銃兎は仕切りを開けた瞬間捕まえられるよう仕切り
の近くに座る。そして、いらいらしながらも外に声が漏
れないように尋ねる。

「ええ。敢えて二郎くんだけ誘って一郎くんには付き添いという形を勧めたとのことですよ」

「あ？まどろっこしいだろ」

「まあ、お陰様で全くバレなかったみたいですよ。」

「ならいい。」

店に早め着いた旨を着く前に連絡したからか、急いでる声と足音が近付いてくる。中王区の間が男性より早めに着いているという異常事態に、個室の前で足音が止まる。明らかに深呼吸をしている長さの無音が響いた後、あ、兄貴というおびえたような小声が聞こえる。それに対し、俺が謝るから、な？あ、開けるぞなどと緊張したような声が聞こえてくる。聞こえてたら意味ないだろうと思いつつも左馬刻は、心の中で舌なめずりをする。まだ全然19時でもないのに、中王区の間が居ると思っている一郎が恐る恐る個室の仕切りを開ける。

「すみません！既に来てるとは思わず...あ？」

「よお。」

「悪い。間違えた。」

「いえ。間違えてませんよ。」

一郎に万が一触れようものなら合コンどころではないので、手を重ねずに仕切りを閉じようとする一郎を止める。早く入ると左馬刻がGlareは出さずに威圧する。

「いや、どう考えても間違えた。」

「兄貴？どうしたの？」

「お久しぶりですね、二郎。間違っていないので早く入って頂けますか？」

「...は？」

「コマンド使われなくなかったら、早く座れ。」

「っち。間違ってたかったらなんだよ。中王区の間と合コンすんのか？」

「あ？ンな訳ねえだろ」

「はあ？」

「中王区の人には来られませんよ。私たちがその合コン相手です」

「帰る」

「一郎。"come（来い）"」

「っ…」

「"come"だ。」

コマンドを使った左馬刻を睨み抗おうとしたが、もう一度コマンドを言われ仕方なく左馬刻から一番遠い席に座る。元々パートナーの前から第二性の相性が良すぎて、パートナーを結んだこともあり、コマンド一つで一郎の第二性は歓喜の声を上げる。相性を置いても、元パートナーで、この人以外とパートナーにはなれないと言われているくらい第二性が求めている人だ。しかも、恋愛感情もある。しかし、それでもパートナーを結ぶ気は無い。せめてもの抵抗だ。

「っち。」

「どうということだよ。」

「それも説明しますので、まずは座ってください」

「はあ？…説明してくれんだな？」

「おや。珍しく素直ですね。ええ。座ったら携帯などの連絡できるものは机に置いてください。」

「はあ？」

「一郎、お前もだ」

「なんで左馬刻に決められなきゃなんねえんだよ」

ファイナルラップバトルが終わり正式に和解したし、何なら左馬刻さんと自然にその時は呼んだ。とは言え、合コンとなれば話は別だ。しかし、譲る気は無いのだろう。仕方なく、三郎に渡されたものも含めて机に出す。そして、コマンドを使われたのを見ていたからか二郎も

大人しく一郎の隣に座り、携帯だけを出す。その隣に銃兎も腰を掛け、それを見る。

「これだけでは無いでしょう？」

「それだけだって」

「では、電波が出るものが他にないか、警察で使っているこちらを」

「...これで全部だ。」

「あ？盗聴器は？」

「中王区のとつが来るのに持って来れるかよ。バレて大変なのは誘ってくれた人だろ」

「...ふうん。ホントに蛆虫どもと合コンする気だったンか」

不機嫌そうな雰囲気漂う。如何にも左馬刻からGlareが出そうだ。それを察した銃兎が空気を断ち切る。

「それでは、まずは注文をしましょう。二郎は何を食べたいですか？」

「うち。てめえも好きなの頼め、一郎。」

一郎と左馬刻はパートナーの時から、ご飯を手ずから食べさせる行為などの食事に関するルールは一切設けなかった。一郎が好きなものを遠慮することなく好きなだけ食べて欲しかったからだ。出会った頃は遠慮していたが、ありえない量を頼み一郎が食べなかったら残すと脅したのだ。それでも入らない量は土産として持たせてくれた。そうして、遠慮を止めさせると同時に胃の容量を見ていたのだ。二郎は遠慮していたが、一郎はそれを知っている為、大人しくメニュー表を受け取る。

合コンということでお金は持ってきているし、三郎が金額も調べてくれていた。その時に気付くべきだったし、絶対に気付けた。中王区の間人が指定したにしては安すぎた。しかし、誘った人物が庶民的で、スルーしてし

まった。庶民的なその人からしたら少し高い。この価格帯は、左馬刻が一郎に気を使わせない為に昔よく利用していたわけでは無いが、パートナーになる前何度もご飯に行き価値観を擦り合わせ、自然と多くなった価格帯。頑張れば気付けたなあと、心の中で一郎は呟く。あの頃は手も出せなかったが今は違う。無駄遣いをする気はない。1つ頼めばいいだろうと、銃兎に自分が手を出せる中で食べたいものを伝える。すると、左馬刻から舌打ちとともに不機嫌オーラが漂い、銃兎から注文のタブレットを取り、次々に一郎が好きなものや一郎が弟に土産にしていたものをポンポンいれていく。左馬刻側には誰も座っていないため、銃兎以外は何をしているか分からないようだった。どっちの弟の好き嫌いかは知ったことでは無いし覚えてもないが、どっちかがセロリ、どっちかが梅干しが嫌いと言っていたのは記憶しているのでそれは避ける。好きなのは片方がペスカトーレで、もう片方はカレーだったはずで、リリックや性格などを考えるとカレーだろ、とカレー味のものもぶち込む。飲み物は知ったことじゃないのでコーラを2つとオレンジジュースを頼む。素知らぬ顔で一郎が言ったメニューと自分のものだけ頼んだと言い、銃兎に返す。銃兎が受け取ると、二郎がメニューを決めたらしく言いにくそうにしている。どれですか？と聞いたところ、控えめすぎるものが指さされる。わかったといい、履歴は敢えて見ずに、自分の分のお茶とそれだけを頼む。二郎が早くと急かそうとするが品物が到着してからだと左馬刻にタブレットを返す。左馬刻は、好きな人にはバレずにこっそりというタイプで会計もスマート。好きな人には、お金を払わせたくも持ち歩かせたくもないタイプだ。見たことも

知っている訳でもないが、同じチームメイトなので見られたくないだろうという配慮だ。

まあ、まさかコーラ2つとオレンジジュースを頼むほどのかつこ付けだとは思っていなかったが。

「おい、早く教えろよ」

「お待たせいたしました。コーラ2つとオレンジジュースと烏龍茶ですね」

「まちが」

「おう。そこ置いといてくれや」

店員の言葉に場が凍り付く。銃兎は意図に気付き、マジか此奴と左馬刻を見る。不思議そうな店員に一郎が間違ってますという前に、左馬刻がさえぎる。店員が飲み物を置き出ていく。一郎はそれを見て、まさか！と思ひ履歴を見ようとするがタブレットはとっくに左馬刻側だ。

「おい、左馬刻」

「誘ったのは我々ですし、今日は我々の奢りです」

「おい、弟。好きなの飲め。」

「...じゃ、じゃあオレンジジュースで」

「弟が気遣ってんな」

普段なら、ガキというが成長してない弟が居るからという逃げ道を作るわけには行かない。左馬刻がガキだと思うなら、と言われるくらいなら言わない方がいい。名前を呼んでもいいが、別に一郎の弟以上の関係を作る気は無い。次男坊もガキと変わらないので論外だ。その違和感に2人は戸惑うが、銃兎は察したのか何も言わなかった。

「いい。丁度オレンジジュース飲みたかったんだ」

「そーか。おら、一郎。てめえはコーラだろ」

「...ありがと」

嫌いになろうとすると、左馬刻はこうやってもっと好きになるようなことをしてきて更にハマって抜け出せなくなるのだ。乾杯をして、一気にコーラを飲む。コマンドを使われただけで、既に第二性は落ちていたのに心も抜けられなくなりそうだ。

「...で？からかいたくて呼んだのかよ！」

「そんな訳ないでしょう。初めて会った時からずっと二郎とパートナーになりたくて協力して頂いたんですよ」

「兄貴は関係ないだろ！」

「...一郎は俺ンだ。」

「なっ...！？」

「あ??」

「...一郎の弟たちは成長しただろ。パートナー作ってもいい頃だ。帰ってこい」

「きゅ、急にどうしたんだよ」

「...でめえが居ねえと、...反抗は許したが、浮気までは許したつもりねえ」

「は？浮気って別れただろ」

「許可してねえ。」

「なあ。い、入間。」

「なんでしょう？」

「兄貴とヤクザってパートナーだったのか？」

「みたいです」

「...でm、左馬刻は他のやつとプレイしたんだろ！？」

「あ？してねえよ。約束決めただろ」

Domもプレイをしてなければクマが出来たり欲求不満になる。左馬刻はそんな様子は全くなかった。解散してすぐは酷かった。本人も知らないが、中王区の間人が服用している抑制剤を飲み安定している。実は一郎も似た抑制剤を使っている。もっとも相性が2人は良すぎたせい

で100%抑えたりは出来なかったけれど。寂雷でさえ入手困難で、寂雷の所に一郎と左馬刻の分だけ言の葉党が卸していた。

ここで少しなんで言の葉党が卸すことになったかの裏話をすると、最初は今回の協力者がコソッと卸していた。しかし、ヨコハマとイケブクロとのバトルを見た言の葉党が卸すようになった。正直そのバトルは、一郎は本気だったが、左馬刻は恋人の反抗期を受け止めているようにしか見えなかった。バトルに出ていた人は気付いていないが、東方天 乙統女はそれに気付き、無花果によりを戻したのか聞いたくらいだ。無花果は、何のことがさっぱり分からずに聞き返したが。

そこで、乙統女はパートナーになったのは相性が良すぎたことと、その抑制剤じゃないと死に至ることに気付く、寂雷に卸すことを決める。寂雷に2人の様子を報告するなら卸すと言い、真正ヒプノシスマイクのことも教えた。乱数に合飲の件をバラすように伝えたのは、寂雷に完全に効いてないと聞いたからだ。無花果は嫌がったが、左馬刻は合飲の唯一の肉親で家族だ。無花果が一番辛いのを知っている。だからこそ、売り上げ云々以前に左馬刻を殺すわけにはいかなかった。一郎もそうだ。二郎や三郎がいるし、協力者の天谷奴の息子でもあった。言の葉党の2人からすれば、一郎が死んでしまうと死んでも償えない。一郎も左馬刻も、どちらも売り上げ関係なく死なせるわけには行かない。抑制剤が効いてないなら、パートナーに戻ってもらうしかない。乱数のクローンを使ってまで引き裂いたから悩みはしたが、別に2人の仲が戻ったところで計画が大きく変わるわけでもない。それなのに動かないのは、自分が嫌っている男性よりも最低だと抑制剤を寂雷に口止めして匿名で卸してい

るのだ。知ってるのは、その2人と寂雷と今回の協力者の4人だけだ。

中王区は基本、医療にまで手が回らない。けれど、第二性は問題だった。欲求不満をなくすには男性と関わるか、女性で相手を探さないといけない。しかし、中王区の人には前者は選べない。中王区に居る人はSub差別を持っている人も多く第二性の対立も強く、後者も厳しかった。そのため、抑制剤だけは特級品で副作用も殆ど無い。その為、寂雷ももう少し欲しいと交渉をした。しかし、とにかく人材が少ないため中王区の間で使うのがギリギリという致命的な問題があり、製造方法を漏らすわけにも行かないので、Dom用Sub用1人分ずつが限界だった。

一郎は相性が良すぎたのが原因でSub dropをその抑制剤でも左馬刻と会った時には起こしていた。左馬刻も会えば欲求不満を起こしかけてはいたが、一郎に会う度につっかかっていたし、抑制剤もあり酷くなかった。何なら、定期的にGlareを出し黙る一郎で欲を満たしていた。細々としたルールは全部破られていたが、自分以外とプレイしないというルールは守られていたので、荒れるほど欲求不満にはならなかった。公然プレイで欲求不満が無かったとは、どちらも思っていないし、一郎はそのせいでSub dropしていたのだが。誰も知らないことなので、一郎は左馬刻が他の人とプレイしたと勘違いしていた。まあ、してなくても一度解消されたと思っているので対して変わらないが。

「は？約束？」

「あ？忘れてンじゃねえよ。パートナーになるとき決めただろ」

「いや、毎日連絡したり、最低でも二週間に一回はプレイもしてねえから、解消しただろ」

「あゝあ？解消するなんか言ってるねえだろ」

「いや、無理があるだろ」

「喧嘩した時は仲直りするまで無理強いしねえ。けど、喧嘩しても他のやつとはプレイしないって約束しただろ」

「...あれは喧嘩じゃねえだろ」

「喧嘩だろ。それによお、弟が成長したら一緒に住むつつたろ。」

「いや、解消したから無効だろ」

「ちゃあんと成長するまで待ただろ。」

そう、ファイナルラップバトルが終わってから正式に和解したため、左馬刻は毎日連絡を送っていた上に、他の約束も守っていた。パートナー解消したと思っていた一郎は気付かなかったし、意味が分かってなかったが、全部昔決めたルールの中の1つだ。二週間経ってはいないから、ルールを破ったわけでもない。むしろ、一郎は訳が分からず無視したので、左馬刻がパートナーのままだというのならお仕置きを受けることになる。

そういえば、Domにルールはないはずだが唯一、一郎が左馬刻に取り付けたルールとも言えないルールすら守っていた。それは、ケガしたり浮気してないか知りたいから一週間に一回はリアル、会えなかったら写真で上半身の写真を送るというもの。何でか先週の休日に送られてきて、一郎は意味が分からなさ過ぎて嫌味かとガン無視したのだ。何なら、一郎が過ごしやすいように好きな飲み物を完備もしてあるのだろう。ご飯に行ったときは左馬刻が払うというルールもあったはずだ。あまりにも衝撃的で呼吸を忘れそうになり、変な音が鳴る。

「ひゅッ...きよ、今日俺の分は俺が払う」

「あ？ダメに決まってンだろ」

「い、いや、あ...ありえないだろ」

「あ？言ってるだろ。俺ンだって」

頭が危険信号をガンガン鳴らしている。そこに一郎が本当は食べたいと思っていたものが運ばれてくる。加えて、二郎が好きそうなものもある。しかも、全部お揃いかと言い、大量に4人で食べきれぬ量がおかれる。銃兎が注文タブレットで何を頼んだかは見えた。確実に1人しかない。そいつは、全部揃ったと返し、なんでもない顔をし、店の人が去ってから口を開く。

「来たンだから食べや。」

「お、俺が言ったの来てねえから」

「何ふざけたこと言ってンだ」

「ふざけてねえ」

「ああ？記憶無くなったンか」

「...ある」

「じゃあ分かんだろ。」

「っ...い、いただきます」

「...い、入間さん。」

「ああ。あなたが食べたいものも届いてますか？」

「い、いや。た、頼んでな」

「私たちの奢りですので、好きなものを食べてください」

「...い、いいの？」

「ええ。飲み物が減って来てますね。好きなものをどうぞ。左馬刻」

「ンだよ。おらよ、自分で頼めや」

「だそうですよ。好きなもの言ってください。」

「...み、水でいい」

「はあ...次は私にジュース飲ませる気ですか？」

「...コ、コーラ。」

「一郎くんもコーラでいいですか？」

「一郎のは俺がやる」

「では、2人分入れたのでどうぞ」

「おう。じゅーと」

「どうかしましたか？」

「...解散したら、セーフハウスに行く」

「分かりました。では、んん。一郎くん、二郎くんを1日預らせていただいてもいいですか？」

「...二郎が良いならどうぞ。今日は合コンと聞いてましたので、元々そうなれば許可するつもりでしたし」

「ふむ。二郎くんどうでしょう？」

「一郎は、一緒に帰っからな」

「送ってくれるのか？」

「ンなわけねえだろ。昔のままにしてある。掃除はしてある」

「うっ」

「連絡しなかったのはお仕置きしねえが、プレイを拒否すんならお仕置きする」

「いや、パートナー解散しただろ」

「許可してねえつつてんだろ。それに帰ンなら明日会えねえぞ」

「誰にだよ」

「先ほどまで合コンの連絡をしていた中王区の方ですよ」

「え！？俺も行っていいの！？」

「ええ。パートナーになれば関係者ですから」

「...ば、パートナー」

「ええ。決めるのは今日でなくとも構いません。しかし、Subの抑制剤が効きにくいのでしょうか？私と軽くお試ししてみませんか？」

「お試し...」

「まあ、抱き着いて褒める程度です。左馬刻や一郎くんほどの相性なら戻れませんが、普通であれば何もありません。パートナー契約はしたいと思わなければ断っていただいて構いません。チャンス、いただけますか？」

「き、今日決めなくてもいいんだよね？」

「ええ。ですが、今日は一緒に過ごしたいと思っています」

「...きよ、今日。」

「帰る時まで考えておいてください」

銃兎は二郎と見つめあい、砂糖が溶けるような目で愛らしいものを見るような目で話し、チャンスと言いながら手を取り甲にキスを落とす。そして、指を絡ませる。流石に真横の2人がいちゃつき始めれば、一郎は誰よりも左馬刻の遠くに座っていたとはいえ気まずく、隣に移る。左馬刻は一郎の食べている姿を見るのが好きなので、横を見つめる。一郎が、左馬刻がパートナーのDomが頼んだものを無言でもぐもぐしている。それだけで第二性が満たされるような感覚になる。飲み物が届き机に置かれる。

「さっきのホントか？」

「ああ。てめえはパートナーだろ？連れてってやる」

「あの人が誰かを頼るって、相当酷いんだな」

「...乱数が前真正ヒプノスマイク使って攻撃してきた時あったろ」

「？？あ！...あ、あった」

「その時居た女が逃げて見つかってねえんだと」

「確か...仄々だったか？」

「ああ。」

「ら、乱数と寂雷さんは？」

「言う気ねえンだろ。」

「ぱ、パートナーって解消してねえの？」

「して欲しいなら言え。」

「うっ...」

「まあ、言った所で解消はしねえが」

「お、俺...」

「colorなら新しく作った」

前のcolorは、あの日二択を迫られた日、左馬刻に絶望して二郎、三郎と道を歩くと決めた日にケジメとして捨てた。けれど、解消していないのであれば新しいcolorではなく、それが良い。新しく作ったとしてもだ。

「なあ、ヤクザ。colorって、チョーカーとかいうやつだよな？」

「あ？ンで知ってンだ」

「確かに。普段、DomとSubのcolorは首輪ですよ。」

「なんでって、兄貴かヤクザ...さ、左馬刻さんが中王区のある人にはパートナーになったの言ったんじゃないの？」

「...確かに俺は言った。」

「あ？ああ、俺も言ったな。それがどうした」

「2人のcolorってこれだよな？」

そうやって二郎はスマホを触り、机にスマホを置いた。そこには引きちぎられたチョーカーが映っていた。

チョーカーの見えるところには、2人の目の色である赤色の宝石が控えめに付いていて、後ろには名前のアルファベットが刻印されている。

「二郎これどうしたんですか？どこにあるんですか？」

「え？どこって、家の金庫の中だけど」

「あ？大切にしてたんか。パートナー解消してねえと思ってたんだな」

「んな訳ねえだろ。どっかに捨てたっての」

「それって中王区の施設にだろ？」

「どういうことだ。」

「詳しくは知らねえけど、合歓ちゃんとあの人が家に持ってきたんだよ」

「あ？」

「手紙と一緒に、ずっと持ち歩いてたんだ。手紙」

三人が手紙を手取る。そして、左馬刻が手紙を開ける。合歓ちゃんの文字で、手紙が書かれていた。そこには、自分が言の葉党に行くのが正しいと思った理由を知りたくて、施設に行こうと思ったことから始まっていた。言の葉党の2人に言っちゃダメだと思い、お兄ちゃんたちが信用している人に頼み、自分の案内で施設に行っただと。誰も入ってなかったらしく、全部2人で回ったこと。ボタンなどを見て何があったか何となく察したこと。最後の部屋に引きちぎられたチョーカーを見つけ、付いてきた人が2人のcolorだと教えてくれたこと。そこで初めて知り、チョーカーは自分が拾い、保管していたことと、言の葉党の2人がしたことへの謝罪が書いてあった。

「兄貴かヤクザに渡すべきだと思って、手紙だけ持ち歩いてたんだよ」

「なんで黙ってた」

「事情ありそうだと思って、2人に相談したんだ。俺しか家に居なかったから。それで、パスワード付きの箱に入れて金庫に入れることになって確認のために開けて写真撮ったんだ」

「これあいつは触ってねえんだな？」
「家族でもない他のDomが触るもんじゃないって言うてたよ？」
「俺、colorこれが良い。」
「一郎。」
「これ、直せねえかな」
「新しくやるって」
「これがいい。」
「...ああ？うち。分かった。おい、じゅーと」
「ふむ。直せるようには見えませんが」
「え？直せるって言うてたよ。」
「あ？合歓がそう言うてたンか？」
「うん。中王区は無理だけど、2人なら直せるって」
「なるほど。あの人なら直せそうですが、嫌がったんでしょう」
「うち。新しいのやるから我慢しろ」
「直せるんだろ？」
「俺以外のDomが触ったもんになンだろ」
「いえ。自分しか直せないなら、あの方は保身で直せないって言う人です。買った店舗もしくは飴村 乱数が直せるのでは？」
「うち。乱数が直せるもんは直せるって言わねえんだよ。明後日取りに行く。」
「買った店舗に行くのか？」
「いいのか？」
「仕方ねえだろ。...プレイの時は、それ付けろ。普段は新しいの付けろ。」
「分かった。」
「ふっ。てめえが戻ってくンならそれでいい」
「あっ」

そう、昔のcolorだろうがcolorを欲しがった。一郎はパートナーを解消する気しかなかったし、されたと思っていた。昔のcolorがあるからなんだと思っていたが、これがいいと言われ左馬刻は上機嫌も上機嫌だった。新しいものを渡そうとは思ったが、一郎が手に入るならどちらでもいい。それを拾って届けてくれた自分の妹に礼を言わなきゃなと口角を上げる。まあ、一郎の不安は全く解消されていない気もするが、あんなことがあったのにパートナーを解消してないという奴だ。どうせ後からセーフハウスに行く。その時に言おう。

「二郎。Domの2人と一緒に部屋に居たんですか？」

「部屋じゃねえけど」

「失礼。ひとつ屋根の下に居たんですか？」

「おい、合歓を数えてンじゃねえ。」

「何言ってんだ。あんた」

「...左馬刻。入間さん、あんたのチームメイトだろ？」

第二性をここまで大体的に話しているが普段はご法度だ。TDDや新生MCDのころは、合歓ちゃんが居たので全員合歓ちゃんの第二性は知っている。というか勘付いた。二郎もSubだから会ってすぐ気付いた。基本ディビジョンラップバトルの選手の第二性すら伏せられている。中王区ですら、1人を除いて伏せられている。その1人はSランクだったため、どう頑張っても隠せず筒抜けだった。SランクのDomに従うなら税金の回収や広告塔に有利と、大公開されている。SランクのDomが従ってるし、上に居るなら言の葉党の3人も当然Domだと思われるし、銃兎もその1人だ。だから、この3人の態度に疑問を持った。

「...合歓はDomじゃねえ」

ぴしゃんと空気が張り詰める。そう、本来ならDomの公表なら言の葉党がすればよかったのだ。現に苦情は減らせても、完全じゃなかった。Domならもう少し減ったはずだ。でも、言の葉党は誰一人公表しなかった。無花果とは交流している銃兎が調べずに勘違いした理由の1つは、無花果はDomだからでもある。そう、無花果以外の2人がDomでは無い。そして合歓の第二性が仮にバレた場合、真っ先に無花果がパートナーに挙がり下世話な目で見られる。そう...碧棺 合歓はSubだ。

「あ、いや。悪い」

「良い。あいつがDomに見えるってことはそんだけ努力したってことだろ。俺の妹だからな」
普段なら機嫌が悪くなるはずだが、一郎とパートナーになり、柔軟な考えが出来た左馬刻はそういうとコーラを一口飲んだ。ウイスキーでも飲んでんのか位その姿もサマになってる。コーラだけど

「は、話変わるんだけどさ」

「どうしたんですか？」

「今日、俺泊まるなら三郎が。それに着替えもねえし」

「ああ。それなら大丈夫だ。まあ、大丈夫ではねえけど」

「ほら！」

「...親父が泊まりに来るんだよ」

「へ？」

「てめえ、今日合コンだと思ってきたんだよな？」

「そうだけど」

「じゃあ何か？俺以外のやつと泊まる気だったンか？あゝあ？」

「帰る気だったんだよ」

「んな訳ねえだろ」

「ホントだって。二郎に悪い姿見せねえだろ！連絡先交換して貰って今日は帰る気だったんだよ」

「連絡先交換する気だったンじゃねえか」

「ご、合コンに来るってことはそういうことだろ！？」

「あ？騙されねえからな」

「何がだよ」

「我々かもと気付かれないために、一郎くんには保護者として遠回しにお願いしたと聞いてますよ」

「...まじ？」

「そういうこった。」

「あ、あー...？」

「誕生日まで待つつもりだったが、...今月中だ」

「何がだよ」

「あ？同棲に決まってンだろ」

「決まってねえよ！それに、また捨てられっかもしんねえだろ」

先程とは比べ物にならないほど空気が凍り付く。左馬刻の顔が般若の方がましと思えるくらい怖い顔をしたあと、無言で立ち上がる。

「さ、左馬刻...？」

「別に怒っちゃねえよ。一郎くんには俺様が、そんな甲斐性なしの裏切りウジ虫野郎に見えンだろ？」

「ち、ちが」

「行くぞ」

「さ、左馬刻サン？」

「恋人にサンなんて他人行儀だろ？ああ。てめえには俺様が恋人にも見えねえってか？

こい。」

ブチギレである。怒鳴ってくればまだいい。いつもみたいに喧嘩をしてくれば、まだ救いがある。もう何を喋っても許されなさそうだ。左馬刻はきっちり2人分机に叩きつけて、個室の扉を開ける。Domがパートナー以外のSubに奢るのは浮気と言われかねないからだ。二郎が美味しいと言わなかったのもDomが手ずから選んだものを褒めるのはパートナーや口説いてる相手がいる場合、誤解されかねないのを知っていたからだ。パートナー以外のDomが手ずから選んだものを褒めるのは、勘違いしか生まないと散々言われたのだ。そのため、2人分を置いて叩き付けたのだ。その行動からも一郎に対する想いが滲み出ている、一郎は脂汗が止まらない。ここで行かない選択肢なんてなかった。左馬刻がパートナーを解消してないと言ってきて、些細な会話も覚えていて弟にも良くしてくれて、全てが嬉しかったのだ。こんなに怒らせる気はなかった。いや、むしろブチギレて当然だ。それでも、冷静に2人分しか置かなかったし、Glareを出さなかった。おかげで立つことは出来る。もし、ここで立たなかったら今度こそ関係は終わりかもしれない。自分が何を言ったか分かってSub dropしそうだし泣きそうだ。でも、自分にそんなことをする権利はない。震える足で立ち上がり、扉を出る左馬刻に急いで付いていく。それに気付いたのか、左馬刻は自分を落ち着かせるために深呼吸する。それがため息に聞こえ、呆れられた嫌われたと頭の中でグルグル考える。左馬刻が、手を差し出す。手に取れば、今度こそ終わりかもしれない為、断る。左馬刻だって完璧ではない、それに怒鳴ろうとしたが、ぐっと堪え一郎を抱き締める。

「ゆっくりでいい。怒ってねえから」

優しい声で左馬刻が一郎に投げかける。言葉も優しい。銃兎と二郎は、左馬刻のそんな姿に心の中で目を丸くし

頬をつねる。一郎もそんな左馬刻に驚き、あまりの優しさに怖さを感じる。そのまま、個室の外に2人で出て行った。

「な、なあ、あ、あれ誰？」

「わ、私に聞かれても」

「お、俺、コーラ飲もうかな」

「私もコーヒーが...いえコーラ飲んだ方がいいですかね。今度から、コーラ常備しましょう。」

合コンの前に恋愛相談に乗ってもらい、その人に倣っただけなのに散々な言われようだ。タバコも酒も今日は離れていた為、あの時のように薬でもやってんのかくらい機嫌が悪くても良いのに、ただの別人だ。コーラにそんな効果は無いのにコーラかもしれないとまで思われている。

「なあ。入間さん」

「銃兎と呼んでください」

「じゅ、銃兎さん」

「なんですか？」

「パートナーってあんなに良いものなのかな」

「そうですねえ。口説いてる側としては、そうと言って方がいいんでしょうけど、人によります。恋愛も人によるでしょう？」

「恋愛とパートナーならパートナーの方が」

「ええ。確かに繋がりも何もかも強いですね。でも、私はダメな例を知っていますので」

「何それ」

「そうですねえ。分かりやすく言うと、DomなのにSub dropしてる人も居ますから」

「銃兎さんも、？」

「はっ。ありえません。私はパートナーになったら手離す気はありませんので」

「へ、へえ」

「気になりますか？」

「ちょ、っと」

「素直ですね」

「だって俺、抑制剤効かねえから。パートナーとか嫌で有り得ねえと思ったけど」

「羨ましくなりましたか？」

「ちげえ。」

「他のDomに言うのはマナー違反でしたね。気になったなら、プレイだけでもしてみますか？」

「い、いいのか？」

「ええ。違ったら別れて、あなたのお気に召したら言うてください。いつまでも待ちますよ」

「いつまでもって。政治のことは分かんねえけど、こーたいすんじゃねえの？」

「どうでしょう。理鶯はまだしも、私と左馬刻は簡単に降りれませんから。存外、別の人になるかもしれませんね」

「逃げられるんじゃねえの？」

「ふっ。未来は誰にもわかりませんよ」

「有栖川みたいなこと言っていていいか？」

「どうぞ」

「俺があんたとパートナーになったらあんたの勝ち。ならなかったら俺の勝ちな」

「それは絶対に負けられませんね。私、負けず嫌いなので」

「勝った方が言うこと聞く。あんたが勝ったら俺の人生全部やるよ」

「それは楽しみです。」

あとがき

翌日の話はいずれ支部に投稿します。マubboロオンリーなのに中王区が出てきて、ごめんなさい、でも必要なのと思い書き上げました。

流れだけ言うと、翌日の朝に中王区から同性婚の法律の施行があります。そして、その件と仄々さんの件でほぼ死にかけのオリキャラが出てきます。そこで、仄々さんの件を聞き、ヒプノシスマイクは終わらず続いていく...と進んでいきます。

ちなみに二郎と三郎もオリキャラを知っているのは、あの中王区事件の時、本当に何も知らないのに中王区に世話係が居らず、乙統女が世話をするわけにもいかないの、世話係になったからという設定もあります。オリキャラには当時、一郎と喧嘩して家出して中王区の門に居たため保護し連絡してある、そして迎えに来たと言っています。そのため2人は、家出しても中王区には来ちゃダメだよ。一郎くんも心配して食事が喉通らなくなるからね、と純粹に言われて何も知らないことを悟ったので、揉めてません。

仄々さんが居る限り、ヒプノシスマイクは終わらない気がしてます。あくまで、全て私の二次創作ですし、それを強調するためにも出張してもらいました。

タイトルどうしよう（